

ハイチを結核から守れ

現地人医師 兵庫医大病院で研修

神戸のNGOが招く

2010(平成22)年1月の大地震で大きな被害を受けた中米の島国ハイチで、結核など呼吸器疾患の予防や治療ができる医師を育てようと、神戸市の非政府組織(NGO)「Future Code(フューチャーコード)」が、ハイチ人医師2人を兵庫医大病院(西宮市)に招き、日本の医療技術を伝えている。2人は約1カ月かけて検診や治療方法を学ぶ。

ハイチ大地震は直下型地震で、約31万6千人が死亡。国会議事堂が倒壊するなど建物の倒壊も激しく、震災後には衛生環境の悪化

からコレラも流行し、感染者は約30万人にのぼった。フューチャーコードは、東日本大震災の被災地の医療支援に参加した若手医師らが中心となり、世界の医療問題に取り組みようと、昨年6月設立。「ボランティア」として目の前の命を救うことももちろん大切だが、現地の医療レベルを整え、ボランティアが帰ってから安定した医療を提供することが大切ではないか」と考えた同団体代表で兵庫医大呼吸器外科助教の大類隼人さん(31)らが、同じように地震で大きな被害を受けた発展途上国、ハイチに興味を持つようになった。

大類さんらは昨年5月に



大類隼人助教(右端)の案内で兵庫医大病院を見学するジェルタ・パスカル医師(右から2人目)とグイー・ジャッセン医師(同3人目)

ハイチを訪問。長年感染症対策や食糧問題に取り組み「ハイチのマザーテレサ」と呼ばれている須藤昭子医師(85)と出会った。

ハイチは結核感染者が多く、須藤さんは結核病院に勤務していたが、地震によって倒壊。地震から1年半ほど経過してもテントで診療する日々が続いていた。地震で多くの医師も亡くなり、現在は千人の患者を1人の医師が診察している状態。須藤さんから「専門的な知識を持つ医師を増やすことが大切」と聞き、ハイチで須藤さんとともに医療活動をしていたグイー・ジャッセン医師(38)とジェルタ・パスカル医師(32)を招くことにした。

2人は今月11日から7月16日まで、同大病院や神戸市保健所で、X線写真の読影術や定期検診の方法などを学ぶ。

兵庫医大病院で研修している2人は「日本に来られて、とてもうれしい。帰国したら他の医師に技術を教えて、未来へつなげるプロジェクトにしたい」。大類さんは「医療レベルの底上げになれば、被災地に国境はないので、今後も支援を継続させて、日本とハイチの懸け橋となるような人材を育てたい」と話している。